# カメラと写真文化のさらなる発展に向けて

歌　川　　健
（ニコン）

まだフィルム時代のころに，カメラは一国産業の見本市だとある光学の先生が言われた．カメラは光学，機械，電気，その他の広範な技術分野において裾の広い技術の支えを必要とし，箱の中には高度な最新技術がいっぱい詰まっていたからである．カメラメーカーは各分野において最新の技術を追求し，その使いこなしに工夫をこらして競ってきた．

ディジタルカメラの時代になって，コンパクトカメラ分野は電気部品の比率が高まり電気メーカーの参入もあって競争が激化した．さらに，スマートフォンカメラの著しい性能向上とともに，通信との連携による新しい画像文化の波が押し寄せて，大きな変革に直面している．

一眼レフ分野でも撮像系や画像処理系のようなディジタル系の比重が著しく増大しているが，交換レンズ群やオートフォーカス（AF）などアナログ性が高い分野のウエイトも依然として高い．多画素化で36メガピクセルのカメラも登場し，どの要素もフィルムの時代より著しく高度な技術が要求されている．このような新展開によって，写真表現の面でも新たな地平が開けようとしている．加えて，ミラーレスという新しいカメラスタイルも登場し，各方面で変化が激しい．

このようにディジタルカメラ分野は，技術面のみならず文化面をも巻き込んで，今後もユーザーの期待を超えた道具と文化を提供していける面白い分野であり続けるだろう．

今後の開発を担う若い人たちには，この興味深い分野に積極的に取り組んでほしいものだが，ディジタルカメラはブラックボックス化して全体感が捉えにくく，また技術が高度化するとともに細分化して，研究開発に魅力を感じさせる引力が低下しているようだ．これからの開発では，専門分野で高度の技術を追求することはもとより，広範な技術領域に対する基本的な理解と，さらに加えて写真文化に対する深い共感が必要とされる．これには自由な発想を促し，意欲的な取り組みを可能とする環境が必要だが，最近は，逆に社会的規制が増え心理的にも余裕がなくなっているのが実情だろう．「世に伯楽ありてしかる後に千里の馬あり，千里の馬はつねにあれども伯楽常にはあらず」という言葉があるが，若い人が存分にその力を発揮できるゆとりのある環境を整えていくことが肝要である．